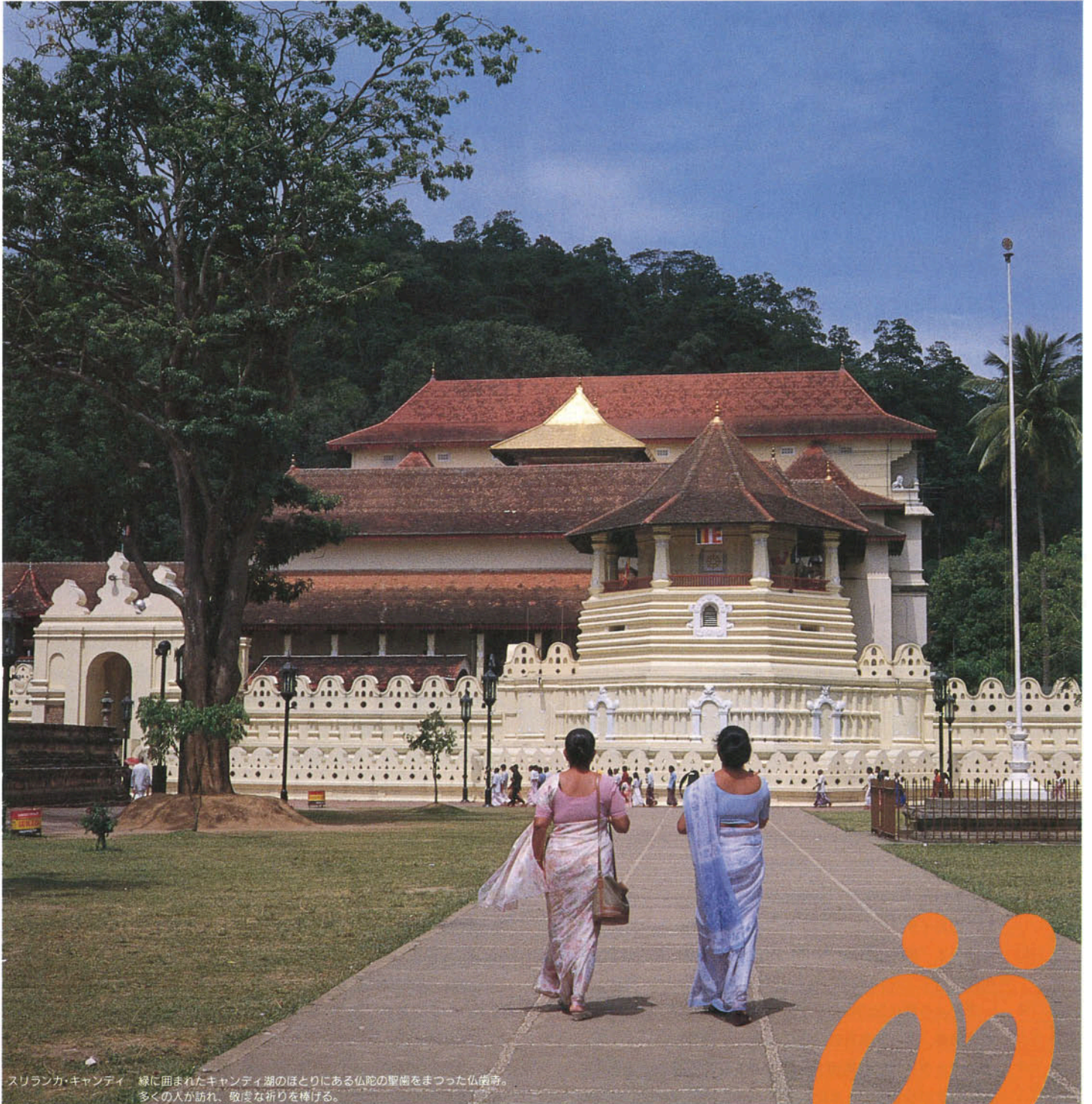


# Asian Breeze



スリランカ・キャンディ 緑に囲まれたキャンディ湖のほとりにある仏陀の聖歯をまつた仏歯寺。多くの人々が訪れ、敬虔な祈りを捧げる。

いま女性たちは——WOMEN TODAY——	2
日本の家族・韓国の家族	3
第2期 海外通信員紹介	8
フォーラム事業報告	10
フォーラムの窓	11



**KFAW**

OCTOBER 1992 No. **6**



## いま、女性たちは——WOMEN TODAY——



国際協力事業団(JICA)総裁  
柳谷 謙 介

貴フォーラムが設立2周年を迎えるにあたり、国際協力事業団を代表して、心からお喜びを申し上げるとともに、アジア諸国の女性の地位向上に向けての皆様方のたゆまぬご努力に対し、謹んで敬意を表します。

開発途上国の女性は、それぞれの社会の中で重要な役割を果たしております。彼女たちの多くは、家族の栄養と健康に配慮しつつ、毎日の食事を作ったり、飲料水や燃料を確保するだけでなく、子供を育てながら食糧生産や家計を助けるための労働にも従事し、自国の国民経済に大いに貢献しています。しかしながら、このような女性の社会貢献は、かつての経済社会開発の観点からは、あまり評価されることがなく、その結果、女性が開発に積極的に参加したり、あるいは開発の受益者となる機会がほとんどありませんでした。

ところが、「国連婦人の十年(1976~85年)」をきっかけとして、開発における女性の役割を正しく理解し、女性の参加と受益を促進する必要性が、開発途上国、援助国、国際機関の間で共通の認識となりました。1985年にケニアのナイロビで開催された世界婦人会議では、それまでの10年間の成果を引き継ぎ、かつ、それをさらに推進するために、「西暦2000年に向けた将来戦略」が採択されました。また、日本では、内閣総理大臣を本部長とする婦人問題企画推進本部が、1977年に策定した「国内行動計画」の中で、同分野における国際協力の推進を重点項目の一つに挙げております。経済協力開発機構(OECD)の開発援助委員会(DAC)においても、1983年に加盟各国に対する「開発における女性の役割を支援するためのガイディング・プリンシプル」が採択され、この原則に沿って「開発と女性(WID: Women in Development)」についての取り組みを強化することとなりました。

このような状況の中で、JICAは、母子保健・家族計画、看護教育、婦人関係行政などの分野で従来から研修コース、プロジェクト方式技術協力、青年海外協力隊員の派遣等を実施してまいりました。また、ODA事業におけるWIDへの取り組みを検討するために、国内の有識者、実務者のご協力を得て、1990年2月から約1年間「開発と女性」援助研究会を設置いたしました。本研究会は、保健、教育、雇用、農業、環境等の重点分野ごとに、開発途上国の女性が置かれた立場と彼女たちが抱える問題を概観するとともに、これらの問題

を解決するために、「女性の視点」を踏まえた開発援助のあり方を検討し、WID事業を推進するためにとるべき措置について提言を取りまとめました。

JICAはこの提言を踏まえ、1991年5月に環境・WID等事業推進室を設置いたしました。同推進室を中心として、WID事業を拡大するために、WID重視の方針表明、組織整備、援助スタッフの研修、WID情報や援助手法に関する調査研究、我が国内外の関係機関とのWIDネットワークの構築等を実施しております。今後とも、このような体制をさらに充実させ、また、貴フォーラムを始めとする内外の関係機関の皆様方と一層協調を図りながら、WID事業を展開してまいりたいと存じます。

さて、本年6月末にDACが発表した1991年のDAC加盟諸国のODA実績(暫定値)によれば、我が国のODAは総額で109.51億ドルとなり、1989年に次いで加盟20か国の中で1位となりました。この実績は、日本政府が推進する「ODAを通じた国際貢献」に対する一般市民の皆様のご理解とご支持の賜物と存じております。

このような状況の中で、我が国政府は、ODAについて我が国内外の幅広い支持を得るとともに、援助を一層効果的・効率的に実施するために、本年6月30日に「政府開発援助大綱」を閣議決定いたしました。同大綱は、援助の原則として、環境と開発の両立、軍事的用途及び国際紛争助長への使用の回避、民主化の促進、基本的人権の尊重等を掲げ、また、重点事項として、アジア地域の重視、環境問題、人口問題等地球規模の問題への取り組み、飢餓・貧困対策としての基礎生活分野の援助及び緊急援助等を挙げております。環境や人口問題と密接に関係するWIDへの取り組みにつきましても、ODAの効果的実施のための方策の一つとして、同大綱に明記されております。

JICAは、この大綱に沿い、開発途上国が抱える諸問題の解決に向けて、関係者の安全対策にも配慮しつつ、最大限の努力を傾注する所存でございますが、これを実施していくに際しましては、これまで以上に地方公共団体を含む国内の各関係機関の皆様方の英知と参加をいただく必要があると認識しております。また、民間援助団体(NGO)の方がたとも、より一層連携を図っていきたく存じます。

そのような事情から、私どもといたしましては、WID事業を推進するにあたりましても、貴フォーラムを始めとする関係団体との協力関係を更に発展させていきたく希望しております。

この機会を利用して、貴フォーラムに対し一層のご協力をお願いいたしますとともに、関係者の皆様方のますますのご発展とご活躍を心からお祈り申し上げます。



## 日本の家族・韓国の家族

『日本と韓国の家族意識の比較研究』より  
—福岡・ソウル調査を中心に—



日本・ウェディングケーキに入刀する新郎新婦



韓国・新郎の両親に挨拶する 新郎新婦

アジア女性交流・研究フォーラムは、経済開発の中で、家族と女性がどう変わってきたかを知るために、アジアの各地での家族意識を比較研究する仕事に取り組んでいます。1991年度は、韓国ソウル市で市民に面接調査を行い、これを福岡県での調査結果と比較しました。ソウル市での調査は、韓国女性開発院との共同研究で実施しました。比較研究の報告書は、日本語と英語で出版していますが、ここではその一部をご紹介します。

### 1 両国の経済成長と家族の変化

日本の産業革命は1890年代からと言われていますが、本格的な産業化は、第2次世界大戦後に新たに開始しました。韓国では1960年代からです。両国共に、先進の産業社会から遅れての急速な産業化とこれに伴う都市化によって、家族の構造も機能も大きく変わってきました。現状では、小家族化、核家族化、雇用労働者家族化、共働き家族の増加、出生率の低下、平均寿命の伸びなどの変化が見られます。

特に、韓国での出生率の低下は日本以上に短期間に生じていますし、二世帯家族（いわゆる核家族にあたる）は、既に1960年代にも現在と同じくらい見られるのが特徴です。

表1 経済成長に伴う日本及び韓国の家族の構造変動の諸指標

		1965	1970	1975	1985	1990	
一人当り国民総生産 (ドル)	日本		1,950	4,490	11,240	23,810 <sup>*5</sup>	
	韓国		252	594	2,194	4,963	
平均世帯員数	日本	3.75	3.45	3.35	3.22	3.10	
	韓国	5.6	5.2	5.1	4.1	3.8	
三世帯及びそれ以上の世帯数	日本 <sup>*1</sup>	27.3	19.2	16.9	15.2	14.0	
	韓国	25.8	23.3		17.0	14.8	
二世帯世帯数	日本	54.9	56.0	58.7	61.1	60.9	
	韓国	65.6	70.1	71.9		67.0	
単独世帯数	日本	17.8	18.5	18.2	18.4	19.5 <sup>*2</sup>	
	韓国			4.2		6.9	
合計特殊出生率	日本	2.00	2.13	1.91	1.75	1.57	
	韓国	4.5	3.5	2.6	1.7	1.6	
平均余命	日本	男	67.74		71.73	74.78	75.91
		女	72.94		76.89	80.48	81.77
	韓国	男	(51.1) <sup>*2</sup>	59.8		64.9	67.4
		女	(53.7)	66.7		71.3	75.4
全女子労働力率中の既婚者比率	日本 <sup>*3</sup>		41.4	51.3	59.2	58.7 <sup>*4</sup>	
	韓国		36.9	43.1	41.1	46.8	

1980年はオイルショック後の経済変動のため除いている。

- \*1 拡大家族的世帯
- \*2 1960年のデータ
- \*3 日本は雇用者の比率
- \*4 1988年のデータ
- \*5 1989年のデータ

資料：韓国（1990）、(韓国の社会指標)  
日本（1991）、婦人教育研究会（統計にみる女性の現状）

### 2 福岡・ソウル調査対象者の属性

対象者はソウルで1,608名、福岡は集計標本数で2,283名、20歳から69歳までの人です。

男女別に見た対象者の学歴と職業は表2、3のとおりです。どちらも、高等教育を受けた人は男性に多いことが示されています。またソウルでは、福岡の対象者より、専業主婦の比率がかなり高くなっています。

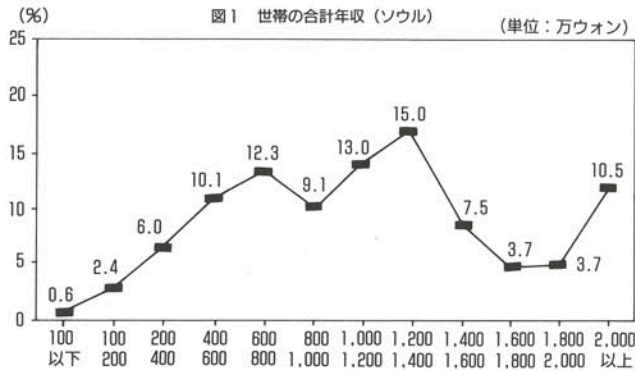
表2 性別の教育程度 (％)

性別 教育程度	ソウル		福岡	
	男	女	男	女
小学校以下	11.5	18.1	20.9	24.2
中学校	13.4	19.6		
高校	38.7	43.2	46.9	54.9
短大以上	36.3	18.9	31.5	20.2
不明	0.1	0.2	0.7	0.7

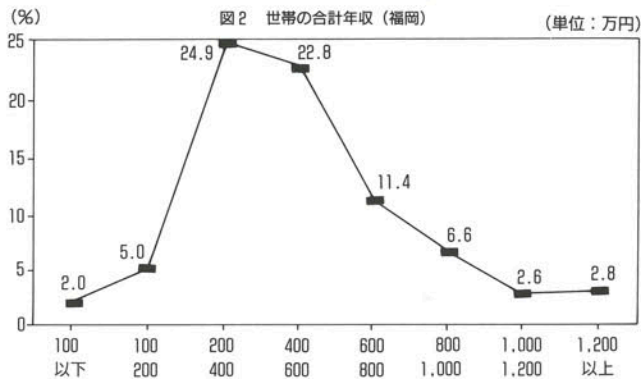
表3 性別に見た職業 (％)

職業	福岡			ソウル		
	計	男	女	計	男	女
専門・(行政)・管理	15.6	22.6	9.1	7.7	12.4	3.5
事務	8.8	9.5	8.1	7.9	11.9	4.5
販売業	8.7	13.2	4.5	14.5	22.9	7.5
商工サービス自営業	14.7	17.4	12.1	8.1	11.0	5.8
農林・水産業	5.2	6.0	4.5	0.1	0.3	0
生産・運輸	10.8	18.8	3.3	12.4	21.5	4.7
主婦(副業・パート)	6.8	0	13.2	5.9	0	11.0
専業主婦	17.3	0	33.5	30.8	0.3	56.9
学生	11.0	11.8	10.2	4.8	6.8	3.1
無職				7.4	12.7	3.0

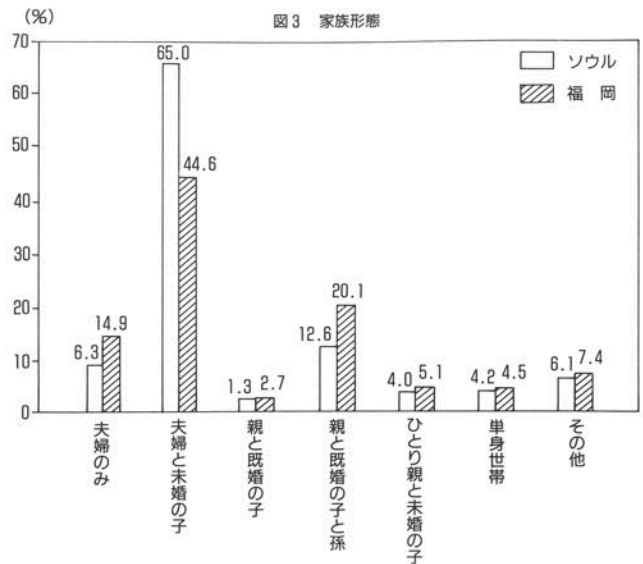
世帯の年収は、福岡では中層に集中する形、つまり平均化していますが、ソウルでは収入階層はバラつきが大きく、それだけ収入格差が大きいことを示しています。(図1、2)



円からウォンへの交換レートは、1992年3月で5.174ウォン

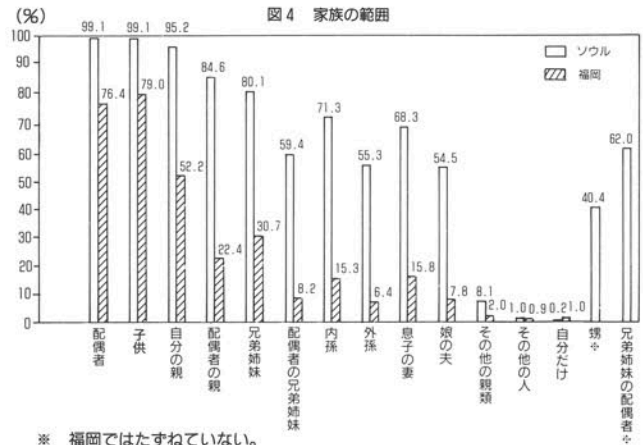


対象者の家族構成は図3のようで、ソウルでの核家族率は75.3%にもなっています。福岡では実情としては、単身世帯が約2割あるのですが、対象者は大家族の人がやや多くなっています。



### 3 家族の範囲

実際には核家族形態で住む人が多いソウルですが、「理想の家族の範囲」は極めて大きくとらえられています。意識の面で、直系大家族の意識がかなり強いことを示しています。福岡では、「夫婦と子供」を中心に家族を考える意識がより強くなっています。



※ 福岡ではたすねていない。

### 作家 森崎 和江

『日本と韓国の家族意識の比較研究』は、福岡とソウルでの調査を中心にまとめられた、極めて今日的な意義のある比較研究で、両者の家族意識の変化に関心を持っている私には、たいそう貴重な資料となりました。たまたま私は7月初めから半月ほど韓国をお訪ねして、ソウル、釜山、そして巨済島の家庭に泊めていただきましたので、家族意識の変化に直接ふれました。いずれの家庭も大学卒業の夫妻家族ですから、言わば平均よりもハイクラスの家であったかと思えます。が、おしなべて感じ取りましたものは、かつての男系の大家族制が、夫婦単位の核家族化していて、女性の発言力や社会参加も7~8年前に比して、飛躍的に高まっているということ。と同時に、その核家族の様式自体は福岡あたりの核家族化と類似していますが、家

族意識の内容には大きな違いがある、という点でした。

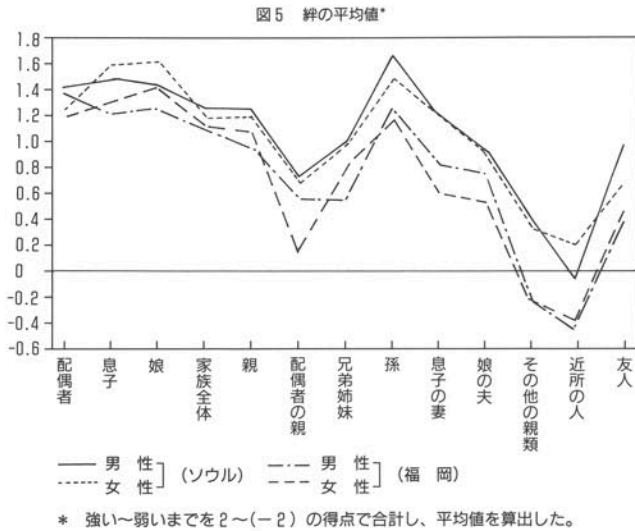
この家族意識の違いについては、比較研究の4章家族意識の項目で、よくとらえられています。何よりも「家族の範囲」の違いがとてもおもしろい。「ソウル市民は40.4%前後の人が甥を家族と考えている」と同調査にありますが、その通りで、男系の甥を女たちも「私の息子」と呼んだりしていますし、兄の娘たちをも家族の一人とみていて、何かと娘がわりに用事を頼んだりしています。男系の本家の孫の子を他家へ嫁いだ叔母が、「私の曾孫」と呼んで、かわいがっている様子は、何とも不思議なぬくもりを感じさせてくれました。

つまり、かつての大家族が培ってきた家族観は、社会的に活動している女性たちに、家族に依存せず、しかもそれら大家族を心情的に包含しておしむ精神領域を、いきいきと維持させていると感じました。



## 4 家族の絆

福岡でもソウルでも、家族への絆意識は、親類や近隣、友人との絆よりはるかに強いことが分かります。(図5)



家族の危機や崩壊が言われる時代ですが、何と云っても家族は人びとにとっての特別な場所であることが示されています。そうした前提の上でいくつかの特徴を拾ってみますと、

- ・福岡でもソウルでも、「孫」への絆意識が非常に高いこと。儒教的な親子(特に父子)関係の世代を超えた連続による「系譜」重視の伝統の現れでしょうか。
- ・しかし、息子に劣らず娘との絆意識も強いこと。特に女性の間でこの意識はとても強いようです。
- ・ソウルでも福岡でも、女性は、夫に対してより子供に対しての絆意識が強いのも注目されます。
- ・夫の親に対する絆意識は、ソウルではまだ強い方ですが、日本では目立って低くなっています。

## 5 家族関係満足度

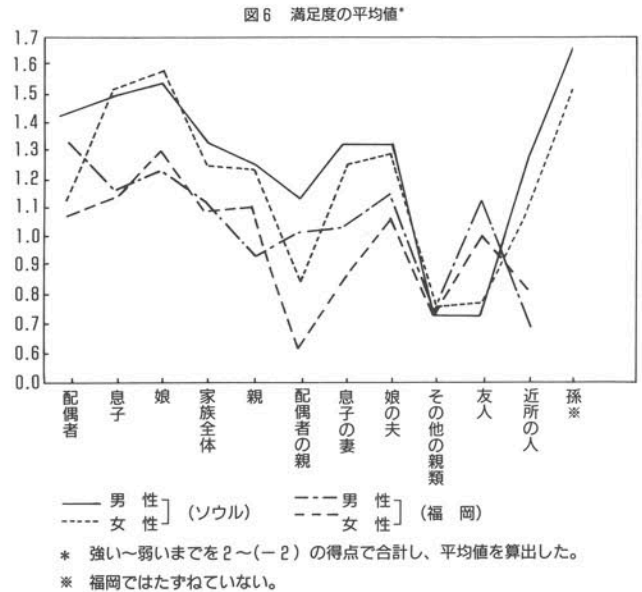
家族のそれぞれの成員への満足度は、絆意識と同じように、総じてソウルの方が福岡より高いようです。

両国共に、特に女性の間で、夫の親に対する満足度が低いのが大変特徴的です。また、配偶者に対する満足度は、男性より女性の方がかなり低いのも共通しています。これらの点は、両国でのこれまでの家族制度や家族生活の中で、家父長制的な規範や役割によって女性が差別的な生活を強いられてきたことへの反応と言えそうです。

ソウルと福岡で大変違う点は、一つは息子への満足度です。福岡では、男女共に息子への満足度が低いのですが、ソウルでは娘と変わらず高くなっています。韓国でよく問題とされる儒教的な「男子選好」と関係があるかもしれません。

もう一つの違いは、福岡で、友人との関係満足がかなり高いことです。家族や親類の関係と違って、友人は個人が自ら選んで形成す

る関係です。これへの満足度が福岡の方でより高いことは、「家族」をそれ以外の関係に拡大して考える家族主義が、福岡で薄れつつあることを示すのでしょうか。

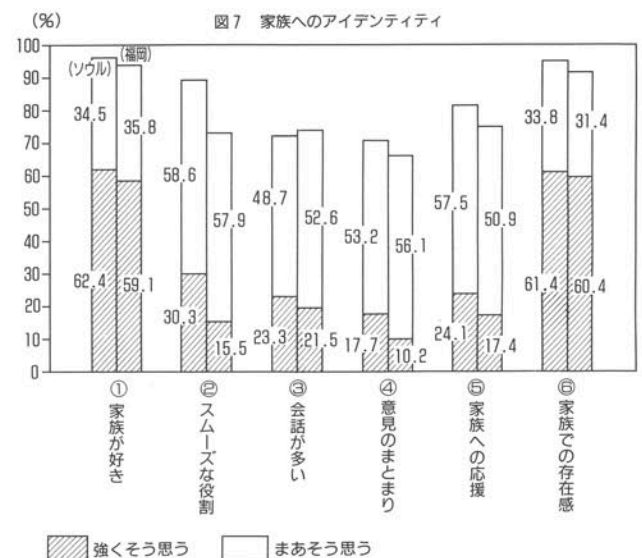


## 6 家族へのアイデンティティ(一体感)

家族へのアイデンティティを、次の六つの項目でたずねました。

- ①私は自分の家族が好きだ
- ②我が家は家族の一人一人がその人にふさわしい役割を持ち、これを果している
- ③私の家庭は会話が多い
- ④我が家は意見がよくまとまっている
- ⑤私が持っている目標に対してみんなが協力して応援してくれる
- ⑥私は自分の家族のなくてはならない一員だ

この6項目に対して、「強くそう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の4段階で回答してもらいました。(図7)



「家族が好き」「家族のなくてはならない一員」という愛着や存在感、両国共に9割前後の人が「強くそう思う」「まあそう思う」と答えており、「よりどころとしての家族」の圧倒的な重みを感じられます。

しかし他方で、役割遂行や会話、まとまり、家族への応援という具体的な行動となると、この圧倒性はやや低下します。

6項目のスコアを合計して、アイデンティティ・スコアをとってみますと、ソウルでは福岡に比べ、やや家族へのアイデンティティが強いことがわかります。

## 7 子供を育てる意味

1982年に日本の総理府が行った国際比較調査では、韓国の人びとの6割以上が、子育ての意味は「家門の存続」と答えていました。これは、家族法自体が、「戸」(チブ)の継承を基本的な考え方としていることに大きく規定された意識だったと言えます。

この調査で、日本人の過半数は「自分の成長のため」と答えており、この時点で「家」の継承の意識は極めて薄くなっていることがわかります。これは、継承すべきものとしての土地や家屋・家業が産業高度化によって労働者家族化した人びとにとってあまり重要な要素でなくなったことも反映していると言えるでしょう。

しかし、今回のソウル調査では、「家門の存続」という意識は大きく後退し、情緒的な意味が相対的に大きくなっています。しかしソウルでのこの調査結果を、性別そして年齢別に見ますと、男性や50代以上の年齢層の人びとの間では、「家門の存続のため」という意識はより強いものが見られます。

図8 子どもを持つ意味(1982)(複数回答)

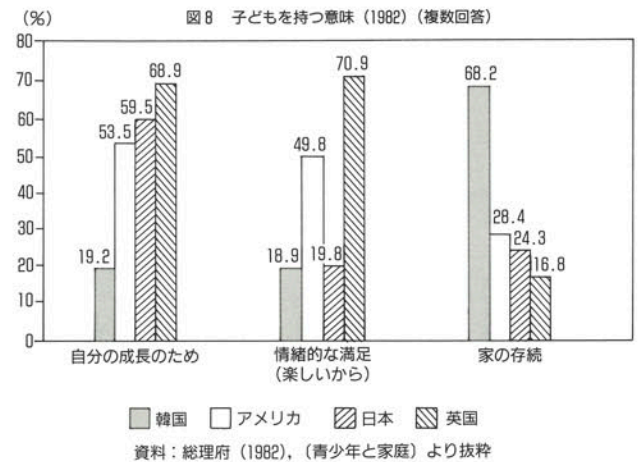
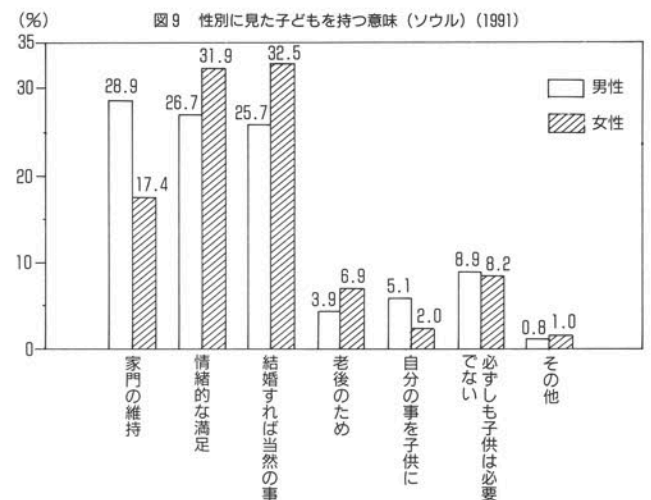


図9 性別に見た子どもを持つ意味(ソウル)(1991)



### 福岡教育大学名誉教授 平田 昌

アジア諸地域女性の相互理解・交流・協力を進めることが強く求められている今日、「開発と女性」研究5か年計画の第一陣としてのこの共同研究報告は、誠に意義深い。

異なった社会・文化における諸事象の比較研究が、相互理解のために重要かつ有意義であることは言うまでもないが、信憑性高く研究的価値を満たしての実際化(特に異国間)となると、企画はもとより準備、実施過程、解析、完成などに数多くの困難を伴う。関係諸氏の労苦は多大であったと推察する。

今回は、「家族意識の比較」として、ソウル特別市と福岡県を対象地区とし、社会構造的単位としての家族に係わる儒教文化、経済開発と家族変動等を踏まえた上で、「個々の人びとが、現実の生活を営む中で家族に抱いている意識」というレベルでの両地区の類似性と相違を明らかにすることが試みられている。具体的には、家族の絆、家族の満足度、アイデンティティ、家族

規範への態度、夫婦親子間の役割遂行、家族の支援ネットワークなどで確かめ、属性、価値観、社会関係等との関連も探られている。福岡県での家族意識調査(「福岡県民意識調査—多様化がはじまった家族—」1989)を土台に、韓国社会の特性を考慮したプリテスト結果による修正等を加えての調査結果の比較考察である。報文中にあるように、「この調査結果で両国の家族意識比較が代表されたとは言えない限界」はあるとしても、少なくとも、今日という時点で、社会的、地理的、経済的、都市的諸条件を勘案した上で、両国の一定条件都市間比較結果としての意義は大きいと言える。

この報告に見る両地区の家族意識の類似性と相違は、当然のことながら、単純、直線的表明でつくるものではなく、微妙な矛盾と相克、交錯、分離、対比を含み、アジア女性問題解決への今後に向けて、なお多くの探求の必要を示唆している。

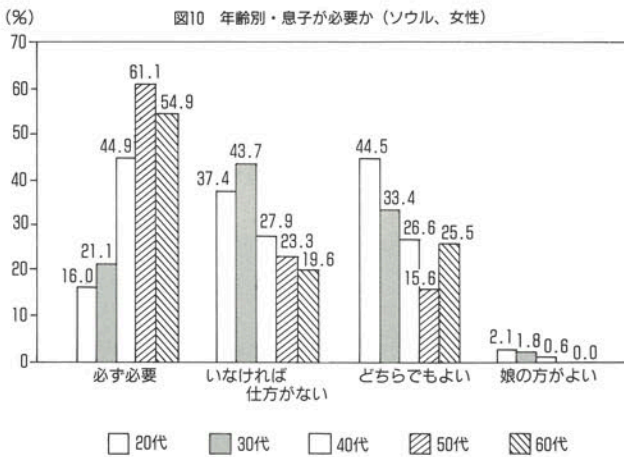
今後の研究を期待する。



## 8 男の子が必要か

「あなたは息子が必ず必要と考えますか」という質問を、ソウルだけでしています。31.8%の人が「必ず必要」、36.1%が「いなければ仕方がない」、31%が「どちらでもよい」と意見が分かれています。しかし全体としては、「必ず必要」と考える人の比率は多数派とは言えなくなっています。図10は、年齢別に見た女性の回答です。50代60代で、「息子が必要」の意識が半数を超えています。

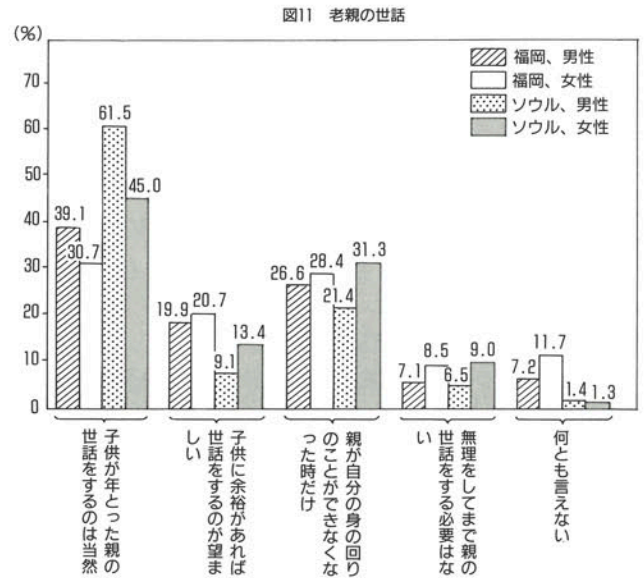
改正された家族法も、「戸」(チブ)の継承者について、男の子が継承を放棄したら娘が継げるようにしました。しかし他方では、特にこの10年間、第2子第3子と出生順位が下がるほど、男の子の出生率の比率が女の子の出生を大きく上回っているという研究も見られます。性比のアンバランスは生涯にわたる女性問題と同時に、配偶者難などの男性問題を生むことになると考えられます。



## 9 老親の世話

儒教文化圏では、親への「孝」の意識は非常に強いとされています。特に韓国では、「忠」に先んじて「孝」が重視されると言われます。

このことは、老親の世話を誰がするかという問題によく反映されています。ソウルの男性の61.5%が、子供がするのが当然と考えています。しかし、ソウルでも、女性は必ずしも無条件にこの考えに賛成していません。「子供に余裕があれば」や「親が自分の身の回りのことができなくなった時だけ」という条件付きの世話がほぼ「無条件に当然」とする考え方と同じぐらい見られます。また少数派ではありますが「無理をしてまで親の世話をする必要はない」という考えは、ソウルでも福岡でも男性より女性の方により多く見られます。



## 10 自分の老後の世話

自分の老後の世話を誰に頼るかは、ソウルと福岡でかなり違いが見られます。

ソウルでは「配偶者に頼る」という答えが男女共に約半数を占め、男性と女性の答えがほぼ同じです。

しかし福岡では、まず、男女で考え方が大きく違います。男性は45.8%が「配偶者」と答え、「子や孫」という答えはわずか16.8%です。福岡の男性がこのように「夫婦単位の老後」を考えているのに対し、女性は、考え方が四つに分かれています。「子や孫」「配偶者」「老人ホームなどの福祉施設」「分からない」と。

これは、日本人の高齢化が進み、女性の平均余命は男性の平均76歳より長く82歳であり、平均的に妻は夫より10年近く長生きをするという事実と関係があるかもしれません。しかし、この寿命差は韓国でもあるのですから、日本と韓国の違いを平均余命だけで説明することはできないようです。

表4 自分の老後の世話 (%)

地域	性別	頼りたい	子供や孫に頼る	配偶者に頼る	人を雇う*	親類	近所の人	老人ホームなどの施設に入る	わからない
		ソウル	男	29.4	49.0	4.2	0	1.1	10.2
ソウル	女	29.9	44.4	7.9	0.1	1.7	11.8	3.9	
福岡	男	16.8	45.8	0.7	—	0	17.9	16.6	
福岡	女	23.4	25.3	6.1	—	0.2	25.1	19.7	

\*福岡では「ホーム・ヘルパーに頼む」を意味する。

## 第2期海外通信員紹介

フォーラムでは、アジア諸国と幅広いネットワークを結ぶために海外通信員制度を設けています。通信員の皆さんには女性に関する多くの情報を寄せてもらっていますが、アジア在住者ならではのレポートが非常に好評なため、今年は昨年の6か国6人から、13か国19人へと大幅に増員しました。今号では、今年5月から活動をスタートした第2期海外通信員を紹介します。

通信員の活動テーマは「家庭教育」。人間形成や社会発展の礎である教育を取り上げ、中でも生活の場で親から子へさまざまな価値観を伝えていく「家庭教育」に焦点をあてます。人びとの暮らし、地域の風習、道徳やマナーなどのしつけ、子供への期待、学校教育との関連など、いろいろな観点から各国、各地域の女性の姿を浮き彫りにしていきます。

日常の生活の中で通信員の皆さんが、読者と同じ目の高さでとらえた事柄を自らの言葉で綴るレポートは、とても有意義な情報になるものと期待します。



Luwarsih Pringgoadisurjoさん  
〈インドネシア〉

科学情報センター所長を経て、現在は女性学雑誌の編集をしています。数多くの「女性と開発」プロジェクトに参加してきました。



Endang Mugiarti Suwondoさん  
〈インドネシア〉

博士号取得のためオランダへ留学中の夫の留守を守っている主婦です。通信員へは2度目の応募で、今年選ばれました。



李 兪 玉さん  
〈韓国〉

高校時代に半年間東京で生活、日本語を覚えました。現在は培花女子専門大学の助教授で、言語学を研究しています。



仲間 まち子さん  
〈マレーシア〉

マレーシアの男性と結婚、クアラルンプール在住の主婦です。家庭教育というテーマにひかれ、通信員活動2年目です。



王 静さん  
〈中国〉

繊維工場で染色の仕事に携わっています。趣味は映画鑑賞で、映画評論クラブのメンバーとして活動してきました。



趙 琬さん  
〈中国〉

インドで生まれ、14歳までインドで生活。旅行社勤務を経て、現在は雑誌Women of Chinaの編集に携わっています。



Khadeeja Ibrahimさん  
〈モルディブ〉

女性問題担当の副部長です。地域の女性活動団体の長も務め、多くの人と交わりながら、女性の地位向上を目指しています。



Yam Kumari Gurungさん  
〈ネパール〉

農村開発のボランティアです。スイスの支援で行われた水供給と公衆衛生のプロジェクトに1985年から5年半携わりました。



朱 耀 先さん  
〈中国〉

河南省党校婦人問題研究所の講師・研究官補で、社会学・女性学を研究しています。研究誌への論文連載、翻訳も手がけています。



Kumud Mohanさん  
〈インド〉

インドタイムズ紙など主要紙に記事を執筆しているフリーライターです。専門分野は、文化、芸術、健康、社会福祉などです。



Fareeha Zafarさん  
〈パキスタン〉

パンジャブ大学助教授で、専門は地域開発計画、社会経済地理学です。日本で開かれた女性問題の国際会議にも出席しました。



Aurora Castro Habañaさん  
〈フィリピン〉

社会福祉開発省の社会福祉担当官を務めています。女性問題に非常に関心があり、自分の仕事にやりがいを感じています。





**Elena L. Samonteさん**  
(フィリピン)

フィリピン大学助教授。専門は社会心理学ですが、じゃばゆきさんやフィリピン花嫁など、日比関係についても研究しています。



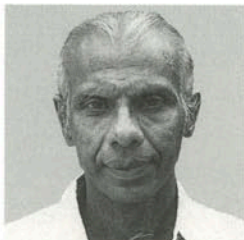
**Shkuropat Anna Vladimirovnaさん**  
(ロシア)

太平洋経済国際センターの部長です。昨年国際会議出席のため来日した際にフォーラムを訪問し、女性問題に関心を持ちました。



**山口 のり子さん**  
(シンガポール)

現地の女性グループAWAREに参加。セクシュアル・ハラスメントに関心を持ち、アンケート調査を計画中です。



**Oliver Gamunu D. W. Jayasinhaさん**  
(スリ・ランカ)

長年勤務した河川開発局を退職し、第二の人生を歩んでいます。禁酒禁煙主義でスポーツ好き、健康には自信があります。



**Keerthy Sironmany Rajaratnamさん**  
(スリ・ランカ)

トリンコマリで、研修の仕事に携わっています。専門は教育で、初等教育、就学前教育などさまざまな教育セミナーを開催しました。



**Indrani Sugathadasaさん**  
(スリ・ランカ)

国家計画省、国立青少年協会の勤務を経て、現在、婦人保健省の婦人局長として、女性問題に取り組んでいます。



**高橋 美和さん**  
(タイ)

チュラロンコン大学大学院の研究生です。文化人類学を専攻し、尼僧を対象にタイ仏教と性についての調査・研究をしています。

## 海外通信員レポート

### パキスタンの家庭教育 Fareeha Zafarさん (パキスタン)

女の子は、生まれた瞬間から性差別の中に置かれます。男性優位の社会で、女の子が誕生すると、がっかりする人が多いようです。彼女の人生における役割は前もって決められ、家庭における教育は、社会化へのプロセスの一部であり、それによって彼女は、パキスタン社会の文化規範や価値、伝統を学び、子供たちに伝えていくのです。

親は、男の子と女の子では全く異なった価値観を伝えます。男の子は積極的で大胆で独立心があり、外向的になるようにしつけられるのに対し、女の子は柔順で忍耐強く、人に依存し、素直で、家庭や子供たちを愛するようしつけられます。娘たちは家族への奉仕を教えられ、その中でも特に、男や年長者に仕えることが、娘へのしつけの重要な事柄です。女の子は料理や洗濯、アイロンがけや裁縫、刺繍や編み物などを幼い頃から教わり、それが自分たちの生来の役割であるかのように受け止めるのです。幼いきょうだいたちの面倒を見ることで、少女たちは母親になるという、人生における主たる役割の準備ができます。

基本的なしつけは母親の役割ですが、家の中の決まりは父親が定め、父親は家の中の女性の行動範囲を定めます。このような家庭における男性優位の形は、女の子の心に焼きつき、その概念は一生つきまといまいます。毎日の生活の中で、女性は男性に付随した立場でしか認められておらず、また女性たち自身もそのように考えています。例えば、〇〇の娘として、姉妹として、妻として、母として生活します。女の子は親や男の兄弟たちに依存するものであるという考え方は、子供の頃から植え付けられ、これは将来、生活のよりどころとなる男児選好の考えにつながります。親は娘を、夫に服従する妻や嫁になるように教え、女性が社会的に認められるのは男の子を産んだときだけなのです。

家庭教育のもう一つは、イスラムの伝統と文化とが色濃い社会体制にあって、貞操と純潔を重んじることです。パキスタンでは95%の人がイスラム教徒で、男の子は家の中の女性を守るようしつけられます。貞操と処女であることは非常に重んじられるので、女の子は何としてもこれを守るよう教えられ、身内以外の男性と接することを禁じられます。姉妹や母親が不義をしたのではと疑い、暴力をふるうような事件がよく起っています。

パキスタンでは生活の上で、男女を分断することが美德だとされています。貞操観念に関連して、女性の公共の場での活動は制限されますし、女の子が外で遊ぶことも、年長の女性が一緒でなければ友人を訪問することもできません。この制限は、思春期から結婚までは特に厳しいものです。この規範は、都市部の中流家庭や、農村部の封建的な上流家庭で厳しく守られており、最上層と最下層の家庭では比較的ゆるやかで、自由があります。

パキスタンでは識字率が低いので、家庭教育は簡単には変わりないでしょう。しかし、教育を受けた母親がいる家庭や母親が働いている家庭では、いくばくかの変化が起っています。



# フォーラム事業報告

## 第3回 アジアセミナー

フォーラムでは、「第3回アジアセミナー」を6月27日～8月8日の毎週土曜日に、8回にわたって開催しました。

このセミナーは、市民の皆さんにアジア及びアジアの女性問題について理解を深めてもらおうと、毎年開催しているもので、約70人の方がたが参加しました。

今回は、昨年に引き続き、「開発と女性」をテーマとして、とりわけ深刻化し国際的な関心の高まりがある環境問題や家族、教育、経済、政治の問題について講義を行いました。

また、7月25日に国連婦人の地位向上部社会問題担当官のドロタ・ギェリッチさん（ポーランド）を招き開催した特別公開講座には、セミナーの受講生以外にも約100人の方がたが参加しました。セミナーの内容及び講師の先生方は次のとおりです。

テーマ	講師
「開発と女性」の現状と課題について	目黒 依子（上智大学文学部教授）
開発と家族意識の変遷	篠崎 正美（アジア女性交流・研究フォーラム主席研究員）
東南アジアにおける開発と教育	丸山 孝一（九州大学教育学部教授）
シルクロードにおける開発と教育	
政策決定と女性	ドロタ・ギェリッチ（国連婦人の地位向上部社会問題担当官）
東アジアの経済発展と人権	小川 雄平（西南学院大学商学部教授）
南・北、農村・都市、女・男 —開発と環境—	岩崎美佐子（日本国際ボランティアセンター環境担当）

ここで、「『開発と女性』の現状と課題について」と題して、ご講義いただいた目黒依子さんのセミナーの一部をご紹介します。

今年6月にリオ・デ・ジャネイロで、地球サミットが開かれました。そのテーマが「開発と環境」ということでした。現代のグローバルな問題が世界政治の場で議論され、どの問題も、異なるテーマ間で、地域間で、相互に関連しているということが、この地球サミットでも明らかになりました。環境問題は、貧困や人口、人権などのテーマと直結しており、また、開発問題は途上国だけでなく、北と南の関係から発生したもので、先進国の中にもなお存在する問題です。その問題の現れ方は多種多様であり、その解決の優先順位も異なっています。これまで、その優先順位は、力のある者が決定する傾向が見られました。そういうあり方に対して、異議申し立てがいろいろな形で出てきたということが、現在の全体的状況です。

WIDを考えると、女性を他のテーマ、例えば環境や人口や貧困などと同じように、単なる一つのテーマとして捉えようとする考え方が一般的に強いのですが、そうではなく、WIDはあらゆるテーマとつながっている概念だと考えることが、まずは出発点だと思います。

## 女性情報マトリックス

フォーラムは、アジアの人びととの相互理解を進めるために、女性情報マトリックス委員会を設置しました。

マトリックスとは、基盤、行列を意味しますが、フォーラムを中心に国内外に網の目のように縦横に伸びる、人と情報のネットワーク基盤をつくらうとするものです。

委員は、教師、会社員、放送ディレクター、PTA役員など、さまざまな職業の男女8人で、相互理解の第一歩として、アジアのそれぞれの国の状況を知ることを目的に活動を開始しました。



活動のテーマは家庭教育。委員会では、メンバーを三つのチームに分けて下記のとおり海外調査を行いました。

第1班 中国（上海、大連）8月16日～8月22日

第2班 スリランカ、モルディブ 8月20日～8月27日

第3班 シンガポール、マレーシア 9月13日～9月20日

調査では、女性問題担当省や教育省などの各国政府機関を始め、教育研究機関、NGOを訪問し、各国の教育の現状を知るとともに、特に、家庭訪問をプログラムに入れ、家庭でどのような教育が行われているかを实地に調べました。実際に母親たちと話し合う中で、家庭において、男の子、女の子がそれぞれどのような教育を受けているか、家庭教育における父親と母親の役割など、国や地域による相違点や共通点などを知ることができました。

また、委員会では、自主研究や講師を招いての学習会も行っており、来年2月には活動成果を刊行物にまとめる予定です。

さらに、女性情報マトリックス委員会は、さまざまな角度からの人や情報の交流を促進するという役目も持っています。そのため、フォーラムの海外通信員と交流を行うほか、国内外の有識者との意見交換なども行っています。委員はまた、地域や学校、職場の中で、アジアの様子やフォーラムの活動を伝えており、マトリックスの網の目は、さらに強く、緻密なものになっています。



▲中国・大連で労働者の家庭を訪問・95歳のおばあちゃんを囲んで



## 海外国内団体紹介

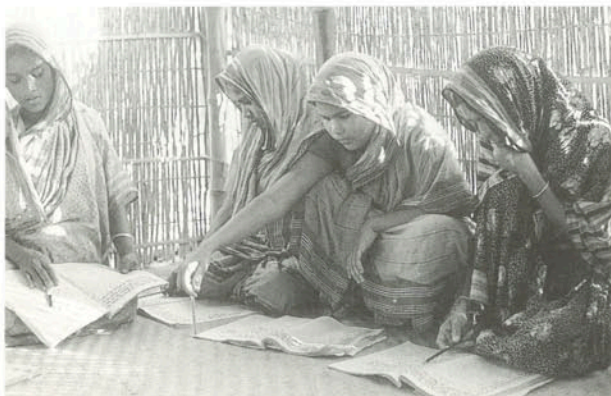
### シャプラニール=市民による海外協力の会

1971年、パキスタン（東）からバングラデシュが独立しました。当時、バングラデシュは政治的独立こそ果したものの、国内混乱はひどく、特に民衆の生活は食糧不足も相まって大変厳しい状態にありました。当時欧米諸国のNGO各団体は競うように緊急援助の手を差し伸べました。日本からも1972年、キリスト教会からの要請を受けてバングラデシュ復興農業奉仕団が組織され、50人の若者たちがバングラデシュに渡りました。この奉仕団に参加した若者たちの有志が帰国後、恒常的にバングラデシュへの支援を続けようと、同年ヘルプ・バングラデシュ・コミティ（HBC）を設立しました。これが今日の「シャプラニール=市民による海外協力の会」（1983年に名称変更）の前身です。

HBCは、当初「子供たちに文具を贈ろう」という活動に代表されるように、慈善福祉型かつ外部救援型の活動が中心でした。それでも日本から駐在員が交替でバングラデシュに赴き、村にも住み込むなど、試行錯誤の連続ながら活動を続けてきました。ところが1977年、駐在先のポイラ村で駐在員が村人たちに襲撃されるという事件が起きました。この事件をきっかけにHBCは新しい協力量針を模索、1980年に入って今日のシャプラニールの基本指針である「ショミティ（相互扶助組合）方式」を取り入れることになりました。

ショミティ方式は、1980年代にバングラデシュの中心的なNGOがそろって取り入れた方式です。シャプラニールは主にプロシッカ（PROSHIKA）というNGOの方式を学び、土地なし層や貧農をターゲットに、20人ほどが一つのショミティを組織し、彼ら自身の自覚や自発性を促進する取り組みをしてきました。今日、ショミティの数は4か村で320組合（6,300人）に上っています。1989年にシャプラニールから独立した姉妹団体の「開発協会（US）」のショミティ数を入れると1,200組合（24,000人）になります。バングラデシュでは男女別べつのショミティを作りますが、わずかに女性の組合数の方が上回っています。最近では女性組合メンバーを対象とした識字学級が大きな成果を上げています。シャプラニールのもとで働くスタッフやワーカーは50人（USを含めると100人以上）にもなりません。日本ではまだまだ小さな市民グループですが、バングラデシュの人びとへの責任を考えると気が引き締まる思いがします。日本国内でもさまざまな活動をしています。ただいま参加して下さる会員を募集しています。お問い合わせは03-3202-7863まで。

（シャプラニール副代表 赤石和則）



▲識字学級（バングラデシュ）

## フォーラムの窓

### ネットワークと情報

7月21日、バンコクに3度目の訪問をした。韓国女性開発院との共同研究を終えて、タイでの比較調査を、チュラロンコン大学社会調査研究所（Chulalongkorn University Social Research Institute=CUSRI）との共同で、開始できることになった。予備調査が終わったので、CUSRIのアマラ・ボンサピッチ所長、研究員のナルエモルさんと、本調査の質問項目について丸3日間の討議を重ねた。

アマラ所長は、小柄で笑顔の魅力的な、温かい雰囲気のある女性である。研究所内ではゴム草履をパタパタいわせながら活動的に動いておられる。アメリカに留学してph.D.を取得、タイの社会構造や文化について、家族や女性の問題についての研究を継続しておられ、若い頃から既にタイでの指導的な社会学者のお一人だったことが、著書や論文を拝見して理解できる。ナルエモルさんは、英国で10年間人類学を勉強してこられたとのこと。美しい女性で、趣味はインドア・テニスとお寺に瞑想に行くこと。「瞑想ですか?」と私がいぶかってたずねると、最近バンコクでは若い人の間に瞑想に行く人が増えているとのこと。「日本にも、「禅」ってあるでしょう、あれと同じじゃない?」と言われて、なるほどと思う。さすが、仏教の国、タイなんだなーと思う。

タイでは、周知のように、5月17日から21日にかけて民主化運動に対する流血の弾圧と政変があったばかりなので、この度の共同研究も無理なもので、とスタッフはずいぶん心配をした。現地のその後の状況を知るために、ESCAPの橋本ヒロ子さんには、度たび国際電話で教えていただき、とても助かった。こうした混乱の時には、信頼できるネットワークからの情報の大切さを、改めて痛感する。あれから2か月後の今、無事に本調査に取りかかれるのも、こうした情報のおかげだと思う。

今回のタイ訪問では、お会いしたい方がもう一人いた。プラティープ・ウンソントムさんである。今回の民主化運動では、7人のリーダーのうちの唯一の女性として、妊娠中でもあるのにハンストに参加するなど、運動の中核で活動されていた。当フォーラムには、スラムでの広範な教育活動を報告していただいたことがある。

残念ながらプラティープさんにはお会いできなかったが、御夫君の秦辰也さんのお話では、9月末の出産を控えてなおお元気に活動中とのこと、安心する。

滞在の最終日、秦さんがバンコクの日本人会で、民主化運動とスラムの人たちの係わりについて講演されるということなので、参加させていただくことにした。流血事件と政変のあと、バンコクでは、これについての外国でのニュースのビデオ類、写真集、パンフレットなどが、街頭で数多く売られたという。NHKの特集番組のビデオのコピーも、タイ在住の日本人を含めタイの中産階級の人びとを中心に求める人が多かったとのことである。また、信頼できる「情報」を求めて各種の政治集会の話聞きに行くスラムの女性たちもいたと言う。

日本人会での秦さんの講演会を計画したのも、約6,500人というタイ日本人会の中の女性だけのグループ「タイを知る会」の人びとだった。この会の女性たちにアジア女性フォーラムの活動を紹介し、強い関心を持っていただいたと思う。確かな情報のための女性のネットワークがまた一つ増えたことになる。

アジア女性交流・研究フォーラム  
主席研究員 篠崎 正美



# INFORMATION

## ●第3回アジア女性会議—北九州

「第3回アジア女性会議—北九州」が11月13日(金)～11月15日(日)の3日間にわたって北九州国際会議場で開かれます。この会議は、フォーラムの「交流」と「研究」を統合する主要事業の一つとして毎年開催しているものです。

現在、オゾン層の破壊、地球の温暖化、熱帯林の減少などに見られるように地球規模で環境破壊が進んでおり、宇宙船地球号の危機が叫ばれています。このような事態に対応するため、今年6月にはブラジルで全世界の首脳が一堂に会した「地球サミット」(環境と開発に関する国連会議)が開催されるなど、世界の国々が協力して国際的な取り組みが続けられています。

そこで、今回は「環境と開発と女性」をメインテーマに、地球環境問題の解決に向けて、環境保全と持続可能な開発に果たすべき女性の役割について、グローバルな視点から共に考え、環境政策への女性の参画の促進を目指します。

この会議のプログラムは次のとおりです。

11月13日(金)

14:00～16:45 北九州女性環境フォーラム

17:30～21:15 アジア・シネマ

11月14日(土)

14:00～17:30 国際シンポジウム

<パネリスト>

ベラ・アブザグ (女性による環境と開発機構議長、アメリカ)

アーナ・ウィットラー (国際消費者機構理事長、インドネシア)

ヴァンダナ・シヴァ (科学・技術・資源政策研究財団コーディネーター、インド)

黒坂三和子 (世界資源研究所上席研究員)

岡島成行 (読売新聞解説部次長)

<コーディネーター>

下村満子 (朝日新聞編集委員)

13:00～18:30 アジア・バザール

17:30～18:30 市民交流会

19:00～21:00 ワークショップ

11月15日(日)

9:30～10:00 日本・タイ共同研究中間報告

10:00～16:00 「研究と討論」(自由発表部会、テーマ部会)

参加申し込み、お問い合わせは、フォーラム(093)551-1220まで。

※掲載記事などの無断転載・複写を禁じます。

## ●フォーラム刊行物発売中

海外通信員レポート集 Vol.1 1991-1992

多民族国家マレーシアの産後の習慣、じゃばゆきさん、上海のバイク女、シンガポール電話相談室など、アジア6か国の通信員から送られてきたフレッシュな情報を1冊のレポート集にまとめました。日本語と英語の同時編集版です。(1冊500円、送料別)

アジア女性研究(創刊号)

アジアの女性問題について、情報交換と討論の場を創り出すために発刊しました。今号の特集は「アジアにおける開発と女性」。複眼的視点でアジアと女性を見つめています。(1冊800円、送料別)

日本と韓国の家族意識の比較研究

本文3～7ページで紹介した、日韓両国の家族意識調査報告書です。(1冊2,000円、送料別)

お求め、お問い合わせはフォーラム(093)551-1220まで。

## ●“Asian Breeze”定期購読受付中

“Asian Breeze”は、北九州市広聴課、各区市民相談室などで無料で配布しています。また、ご希望の方には、直接郵送による定期購読を受け付けますが、この場合は送料をご負担いただきます。

お申し込みは、フォーラム(093)551-1220まで。

## 編集後記

夏の終わり、スタッフは編集室を飛び出して、数か国の海外通信員を訪問しました。何百キロも離れたまちから車を飛ばして私たちのホテルに会いに来てくれた方、家族総出で暖かいもてなししてくれた方…… どの笑顔もまるで旧知のような錯覚を覚えました。「よい仕事をしていますね」とてもうれしい言葉でした。 (S)



fresh, powerful, beautifulと三拍子そろったスタッフです



アジア女性交流・研究フォーラム

〒802 北九州市小倉北区浅野3丁目9-30 北九州国際会議場8F  
PHONE(093)551-1220 FAX(093)551-7535